

主日礼拝説教「そこにあなたがいるから」

日本基督教団石神井教会 2017年11月19日オープンチャーチ

【旧約聖書日課】出エジプト記 6章2～13節

²神はモーセに仰せになった。「わたしは主である。³わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。⁴わたしはまた、彼らと契約を立て、彼らが寄留していた寄留地であるカナンの土地を与えると約束した。⁵わたしはまた、エジプト人の奴隷となっているイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした。⁶それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。⁷そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働の下から導き出すことを知る。⁸わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手を上げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える。わたしは主である。」⁹モーセは、そのとおりイスラエルの人々に語ったが、彼らは厳しい重労働のため意欲を失って、モーセの言うことを聞こうとはしなかった。

¹⁰主はモーセに仰せになった。¹¹「エジプトの王ファラオのもとに行って、イスラエルの人々を国から去らせるように説得しなさい。」¹²モーセは主に訴えた。「御覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオが唇に割礼のないわたしの言うことを聞くでしょうか。」¹³主はモーセとアロンに語って、イスラエルの人々とエジプトの王ファラオにかかわる命令を与えられた。それは、イスラエルの人々をエジプトの国から導き出せというものであった。

【参考聖句】詩編23編（賛歌。ダビデの詩。）

- 1 主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
- 2 主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い
- 3 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。

- 4 死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。
- 5 わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる。
- 6 命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。

すべての人を歓迎します

今日は、教会の皆さんに「一人が一人を」お連れいただくことを目標にしましょうと呼びかけてきました「オープンチャーチ」の一日です。いつもおいでくださっている皆さん一人ひとりがそれぞれに一人のご家族かご友人をお誘いくださったとすると、この礼拝堂は、三人掛けのベンチに詰めて座っても、満員御礼になるはずです。もちろん、今日、「一人が一人を」お連れするというのは、今ここでされている礼拝だけのことではありません。何でもよいから、今日、教会をのぞきに来ていただければ、ということなのです。

教会というところがご自分とは関係ないと思われている方、敷居が高いと思われている方、行ってみたいと思っていたけれどもチャンスが無かったという方。そのような方が、今日ここにおいでくださっているとすれば、わたしたち教会は、心から歓迎をいたします。お迎えしたわたしたちのおもてなしは、もしかすると不十分なものかもしれません。せっかく来てくださったのに、うっかり、わたしどもも教会の誰も、お声もかけずに、ご挨拶もせずにおるということがあるかもしれません。けれども、そうであっても、むしろ遠慮せずに入りに込めたいと思います。教会は、教会の信者だけのものではありません。すべての人のための場所です。すべての人に開かれたところです。すべての人をお迎えすることを使命とする営みなのです。

そのことを皆さんに知っていただくために、今日は、特別なことをご用意し、特別なゲストもお迎えしました。午後のコンサートのための音楽家の皆さん。書籍などを販売して下さるキリスト教書店の方。ただ、この礼拝は、特別なゲスト説教者を迎えるわけでもなく、ほぼ普段どおりの礼拝を整えさせていただきました。何よりもわたしたちが大切にしているこの礼拝を、いつもどおりのものとして皆さんに知っていただきたいと考えたからです。

そのように考えて選びました、先ほど歌った讃美歌 120 番「主はわがかいぬし」を、ご存じの方はどれほどいらっしやっただしょうか。この讃美歌は、旧約聖書の詩編 23 編を歌うようにした「詩編歌」の一つとして、16 世紀の宗教改革時代に作詞されたもので、いろいろな曲に付けて歌われてきたものです。教会の営みの多くの場面で唱えられる、この詩編 23 編の言葉を、今日の礼拝にお集まりの皆さんと一緒に讃美の歌として歌わせていただきました。

キリスト教会が、ルーツでもあるユダヤ教から受け継いだ祈りと讃美の言葉の一つです。神を羊飼いとし、自分たちは、その羊飼いに養われる羊の群れであると、聖書の時代の人々は、信仰を言い表しました。現代の日本に生きるわたしたちには縁遠いイメージかもしれません。それでも、想像することはできます。羊の群れには、大きな羊や、古株の羊もいることでしょうが、自分たちの中にリーダーがいるわけではありません。ただ、羊飼いに導かれる。自分たちの羊飼いがだれかを知って、その羊飼いに従う。そうすることによって、ときに何千という数の群れが、一つの群れとして共に歩んでいくことができる。わたしたち教会は、そのような者として共に歩んでいくことを、願っているのです。

「わたしは主である」

主イエス・キリストは、「良い羊飼い」にたとえられることがあります。けれども、主イエスのこの世での職業が羊飼いだったわけではありません。主イエスは、親の職業を継いで大工を生業としていたと伝えられています。あるいは、主イエスの弟子たちがいましたが、彼らの中にも羊飼いがいたわけではありません。弟子たちの職業は、ガリラヤ湖で漁をする漁師だったり、人々から皇帝のための税金を集める徴税人であったり、さまざまでしたが、おそらく羊飼いはいなかったのです。そもそも、主イエスのご生涯や教会のことを伝える新約聖書で、実際に羊飼いが登場するのは、主イエスの降誕物語の中だけです。主イエスがお生まれになられたときに、夜通し野宿して羊の群れの番をしていた羊飼いたちが、天使たちの知らせを聞いて、飼い葉桶に寝かせてある幼子を訪ねていった、という逸話です。主イエスと羊飼いの接点は、もしかすると、それだけだったかもしれません。それでも、主イエスが「良い羊飼い」とたとえられるのは、詩編 23 編をはじめとする旧約聖書が神を「羊飼い」として描いているからです。

旧約聖書の物語に登場する重要人物は、多くの場合、実際に羊飼いとして描かれています。「創世記」の大半で描かれるアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヤコブの息子たちという一家は、遊牧生活をする羊飼いでした。ヤコブと息子たちはエジプトに移住し、その子孫たちは羊飼いという仕事をやめてしまったようです。その中から現れて彼らをエジプトから連れ出したのが、今日の朗読で登場したモーセです。彼は、ファラオの幼児虐殺命令の魔の手を逃れて、逆に、ファラオの王女のもとで王族の一員として育てられました。ところが、40 歳でファラオに逆らうことになり、逃れて、ミディアン族の羊飼いのもとに身を寄せ、40 年間羊飼いを生業とすることになったのです。さらに時代が下って、旧約聖書のもう一人の重要人物、ダビデ王は、詩編の作者とも伝えられています。もともと羊飼いで、羊の群れの番をしながら豎琴を奏し、詩歌を歌っていたと言われていいます。

羊飼いと羊の群れ。その関係をよく知っている人たちが、そのたとえを用いて、神と人との関係を語りました。

「わたしは主である」。モーセに、そう名乗られる神が、ここで、「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった」とお語りになられています。「主」というのは、旧約聖書では神の名を指しているのです。そのご自分の名を、かつて知らせずにいたと、神はおっしゃられています。モーセに対しては、この出エジプト記 3 章で、「わたしはある」という者だ(3:14)と名乗られています。その名を隠していらっしやった、ということでしょうか。実際には、創世記をきちんと調べてみると、アブラハムとヤコブに対して一回ずつ「わたしは主である」と告げられているところがあります(創 15:7、28:13)。ここでは、モーセに対して神が事実と反することを言われている、ということなのでしょう。それとも、神は、アブラハムやヤコブに対しては、うっかり口を滑らせてしまった、ということなのでしょう。

「主よ」とお応えするまで…

「わたしは主である」。この言葉は、今日朗読を聞いた箇所だけで、三回も繰り返されています（2節、6節、8節。原文の表現では7節も同様）。モーセは、この後の物語で、この言葉を数えきれないほど繰り返し聞かされます。なぜ、それほどに繰り返されるのでしょうか。「主」が神の御名であるならば、その大事なお方の名を、モーセは、なかなか覚えられなかったということなのではないでしょうか。

人のお名前を憶えることが必要な職業があります。牧師もそのような一つですが、わたしなどは、教会にいらっしゃる方のお名前を一度お聞きしただけではなかなか覚えられないことがあります、ときに冷や汗をかきながら、そっと隣りの人に「この人のお名前は？」などと聞いてしまうことがあります。中には、そのようなことをよくご存じで、お顔を合わせるたびに何度でもお名前を名乗ってくださる方がいます。そのように名乗ってくださるような方のお名前は、案外早く覚えられるものであったりするのですが、それでも、わたしは、大変ありがたいことだと思えます。少なくとも、そのようにしてお互いの関係を作っていこうとしてくださっているのだと思うからです。

考えてみれば、わたしたちは、子や孫が生まれると、真っ先に、するのではないのでしょうか。「ママだよ」「パパだよ」「バアバだよ」「ジイジだよ」等などと。生れたばかりのときから、言葉をしゃべるようになる前から、顔を合わせるたびに、何度でも繰り返し、赤ん坊に対して、そう名乗るのです。何度でもそう告げて、その子が言葉を発し、「ママ」「パパ」「バアバ」「ジイジ」と、間違いなく呼びかけるようになるまで、根気強く名乗り続けるのです。そのようにして、家族の関係を作っていくのです。

モーセが神から繰り返し「わたしは主である」と告げられたのも、そのような関係を作っていくことを、神がなさってくださっていたということなのではないのでしょうか。モーセには、語り掛けてくる方が何者なのか、なかなか分からなかったのです。何者なのか分からず、その真意も測りかねていました。そのモーセに対して、神は、「わたしは主である」とお告げになられて、ご自分が何者なのか、どのような関係にある者なのかを、お教えくださろうとしたのでしょう。

モーセは、この「わたしは主である」という言葉と共に、「主」である神が自分に対してお望みくださっていること、期待してくださっていること、使命としてお与えになろうとしていることを、悟るようになっていきました。それは、また、教会に集められ、神の御前に共に立つようにされ、神の御言葉を聞くように導かれている、わたしたち一人ひとりのことでもあるのでしょう。

「わたしは主である」。それに対して「主よ」とお応えする。「主はわたしの羊飼いです」と応じる。そのような関係を始め、その関係の中に生き始めるようにと、わたしたちは、招かれてきました。この招きは、すべての人に開かれています。数えきれない羊の群れのように、すべての人が、同じ招きの中で、共に平和のうちに生きていく道を得るようになるためです。この、遠大な、途方もなく素晴らしい神のご計画の一端を、わたしたち教会は担わせていただいているのです。